知能、学業成績のずれと適応性の問題*

福岡女子大学

町 田 恭 三**

一 調査の目的

本調査は知能検査と学業成績との間に「ずれ」のある者の、人格特にその適応性を、客観的に明らかにする事を企図して行われたものである。

二 調査の対象と研究手続

1 調査対象と対象選出の手続

福岡市内中学校4校（中心部を代表するもの2校，周辺部・中間部を代表するものそれぞれ1校宛），小学校3校（中心部・周辺部及び中間部を代表するものそれぞれ一校宛）の，中学校は第1，2，3学年計2439名，小学校は第5，6学年計561名より，知能検査結果と学年成績のずれが，二段階乃至それ以上に及ぶもの，及び知能検査と学業成績との間にバランスのとれているもの，中学校は男子24名，女子19名，小学校は男子20名，女子15名（学年を通じてランダムにサンプリングしたもの）を本調査の対象として選出した。

2 対象選出に当り使用された検査と学業成績

知能検査は，中学校生徒に対しては新制田中B式知能検査第一形式，小学校児童に対しては田中B式知能検査を使用，知能検査結果と比較する学業成績としては，昭和27年第二学期末に施行せられた教師作製略式客観テスト（各学校別）による成績中，国語，社会，数学，理科（中学校に於ては更に英語）の成績の平均値を使用した。

3 児童生徒の各学年別，男女別内訳及び知能検査と学業成績のずれの状況は，第1表及び第2表に示す通りである。但し，そのずれが三段階に及ぶものは，中学校第2学年男子，小学校第5学年の男子及び女子に各1名

存在したのみであつた。

4 各標本集団に研究の為施行せられたパーソナリティテストは，「適応性診断テスト」（長島貞夫・山崎正著金子書房発行）である。

三 結 果

1 「適応性診断テスト」の10個の特性中，甚しく不適応と考えられる20パーセンタイル以下の特性所有者のパーセンテージを示すと，第3表，第4表の如くなる。これ等の表は中学校に於ては，20パーセンタイル以下の非常に低い特性を一個以上所有する者のパーセンテージは，バランスド・アチーヴァーに対し，オーヴァー・アチーヴァー，アンダー・アチーヴァーはいずれも高いこと（CR検定の結果2.5%以下の有意水準で有意，但しオーヴァー・アチーヴァーとアンダー・アチーヴァー間には一応の傾向はあるらしいが，しかし検定の結果有意な差は認められなかつた）。反対に全然20パーセンタイル以下の特性を持たぬ者のパーセンテージは，バランスド・アチーヴァーが，オーヴァー・アチーヴァー，アンダー・アチーヴァーの何れよりも高いこと，小学校に於ては，特にバランスド・アチーヴァーとオーヴァー・アチーヴァー間には殆んど差異がみとめられないことを示している（アンダー・アチーヴァーはバランスド・アチーヴァー，オーヴァー・アチーヴァーに比し一段低いのであるが，その差は5%以下の有意水準で有意な差とは認められない）。

2 適応性の総計に於て，80パーセンタイル以上を示した者のパーセンテージは，第5表の示す如く，小学校・中学校共に，バランスド・アチーヴァーが最も高く，オーヴァー・アチーヴァーこれに次ぎ，アンダー・アチーヴァーは最下位となつている（但しCR検定の結果中学校は0.25%以下，小学校はオーヴァー・アチーヴァー，アンダー・アチーヴァー間の差を除いて，他は0.5%以下の有意水準で，いずれもその差は有意）。

3 第6表は，中学校生徒の場合に於けるこれ等3群

* Overachiever and Underachiever and the Adjustment Problem of School Children

** by Machida, Kyoza (Fukuoka Women University)

Table 1 中学校に於けるずれの状況 (Nは人数)

学 年	N	OVER-ACHIEVER				UNDER-ACHIEVER				BALANCED	
		1 σ		2 σ		1 σ		2 σ			
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1	男 409	110	26.8	12	2.9	82	20.4	9	2.2	196	47.7
	女 316	70	22.1	10	3.1	54	17.0	8	2.5	174	55.3
2	男 396	118	29.7	12	3.0	63	15.9	9	2.2	194	49.2
	女 354	103	26.2	11	3.1	72	20.0	3	0.8	165	49.9
3	男 521	134	25.7	15	2.8	82	15.7	7	1.3	283	54.5
	女 443	125	28.2	12	2.7	71	16.0	5	1.1	230	52.0
計	2439	660	25.4	72	2.9	424	17.4	41	1.6	1242	52.7

Table 2 小学校に於けるずれの状況

学 年	N	OVER-ACHIEVER				UNDER-ACHIEVER				BALANCED	
		1 σ		2 σ		1 σ		2 σ			
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
5	男 132	34	25.7	9	6.8	22	16.6	5	3.7	62	47.2
	女 109	30	27.5	2	1.8	20	18.3	1	0.9	56	51.5
6	男 176	35	19.8	3	1.7	47	26.7	3	1.7	88	50.1
	女 144	44	30.5	4	2.7	29	20.1	3	2.0	64	44.7
計	561	143	25.4	18	3.2	118	21.0	12	2.1	270	48.3

Table 3 20パーセンタイル以下の特性を持つ者の比較 (中学校)

20パーセン タイル以下 の特性数	BALANCED		OVER-ACHIEVER		UNDER-ACHIEVER	
	N	%	N	%	N	%
0	20	46.5	18	27.6	7	18.4
1	8	53.5	13	72.4	8	81.6
2	3		14		3	
3	6		9		5	
4	2		3		4	
5	1		5		3	
6以上	3		3		8	

Table 4 20パーセンタイル以下の特性を持つ者の比較 (小学校)

20パーセン タイル以下 の特性数	BALANCED		OVER-ACHIEVER		UNDER-ACHIEVER	
	N	%	N	%	N	%
0	22	62.8	11	64.7	5	41.6
1	7	37.2	3	35.3	2	58.4
2	1		2		3	
3	4		1		2	
4						
5以上	1					

が、10個のそれぞれの特性と、その総計に於て得たパーセンタイルの平均を示したものであるが、殆んどすべての項目に亘つて、第1位はバランスド・アチーヴァー、第2位はオーヴァー・アチーヴァー、第3位はアンダー・アチーヴァーであり、特にアンダー・アチーヴァーに於て大巾にその値が低下していることを表している。特にt検定の結果は、母集団に於てもアンダー・アチーヴァーは全特性に亘り、オーヴァー・アチーヴァーは4個の特性に於て、顕著な差をバランスド・アチーヴァーに対して持つと考えられる。しかし小学校児童にこれを見る時(第7表)、アンダー・アチーヴァーはバランスド・アチーヴァーに比し、殆んど総ての項目に亘つて低いパーセンタイルを示しているのであるが、オーヴァー・アチーヴァーに於ては、寧ろバランスド・アチーヴァーに比し、高いパーセンタイルを示している特性が多い。t検定の結果、その有意性は認められないのではあるが、しかしこのことは、オーヴァー・アチーヴァーには、極めて低い適応性の所有者の少いことと共に、青年期前のオーヴァー・アチーヴァーの一傾向として、一応注目されてよいであろう。

4 第1図及び第2図は、各特性に於て、20パーセンタイル以下しか取れなかつたオーヴァー・アチーヴァー

Table 5 適応性(総計) 80 パーセンタイル以上のもの

	BALANCED		OVER-ACHIEVER		UNDER-ACHIEVER	
	N	%	N	%	N	%
中学校生徒	19	44.1	17	16.5	4	3.8
小学校児童	21	60.0	11	31.4	2	16.6

Table 6 特性別パーセンタイル・ランクス (中学校)

	BALANCED	OVER-ACHIEVER	UNDER-ACHIEVER
1 異常傾向	46.4	41.2	38.9
2 神経質的傾向	52.6	50.4	* 42.5
3 自尊感情	61.6	* 48.2	* 44.2
4 退行的傾向	56.0	52.7	* 44.8
5 自己統制	67.2	* 57.6	* 44.8
6 社会的技術	53.0	* 46.0	* 39.3
7 統率性	62.4	58.2	* 52.6
8 家庭関係	59.1	53.1	* 44.6
9 学校関係	51.8	52.8	* 37.7
10 近隣関係	60.8	* 51.7	* 44.6
適応性(総計)	61.0	59.0	* 48.3

* 1%以下の有意水準で Balanced-achiever との差が有意

Fig 1 20 パーセンタイル以下の特性の分布状態(中学校)

Table 7 特性別パーセンタイル・ランクス (小学校)

	BALANCED	OVER-ACHIEVER	UNDER-ACHIEVER
1 異常傾向	59.0	64.8	59.9
2 神経質的傾向	62.8	57.0	* 42.5
3 自尊感情	69.4	68.8	* 52.9
4 退行的傾向	65.2	70.5	53.7
5 自己統制	68.3	64.6	59.1
6 社会的技術	65.0	65.5	* 43.7
7 統率性	65.4	71.4	58.7
8 家庭関係	73.1	78.0	* 60.3
9 学校関係	57.8	71.7	* 42.5
10 近隣関係	70.4	77.0	62.9
適応性(総計)	77.6	80.6	63.3

* 1%以下の有意水準で Balanced-achiever との差が有意

Fig 2 20パーセンタイル以下の特性の分布状態(小学校)

ー、アンダー・アチーヴァーの、パーセンテージを比較したものである。その差僅少の為参考に見られるだけであるが、オーヴァー・アチーヴァーも、時にはアンダー・アチーヴァー以上の欠陥を持つ可能性のあることを示している。

四 結 論

知能に於て、例えば第3段階の者が、学業成績に於ても第3段階に位置するならば、極めて当たり前である。開いても1段階ぐらいであるならば大した問題はない。し

かし両者の間に2段階乃至それ以上の開きが現実に於てあるとしたならば、それは当たり前ではない。この場合、適応性に於ける欠陥とその開きと何れが原因であり、結果であるか、それは児童生徒の一人一人について、十分調査されなければならない問題ではあるが、特に中学校に於ては、アンダー・アチーヴァーは勿論、オーヴァー・アチーヴァーも、適応性のある特性は相当劣っている

のである。

このことより子供達を円満な人格の所有者たらしめる為に、悪い刺激は勿論、常識上よいと思われる刺激であっても、その過剰刺激は十分避け、排除し得るものは排除しなければならないのではないかと私は考える。要するに知能と学業成績のずれは、単に表面的なずれのみには止つてはいないのである。

OVERACHIEVER AND UNDERACHIEVER AND THE ADJUSTMENT PROBLEM OF SCHOOL CHILDREN

By Machida Kyozo

Fukuoka Women's University

I found the following facts in my investigation concerning to the overachiever and underachiever of the elementary and junior high school children :

Underachiever is remarkably inferior to balanced

achiever in the personal and social adjustment throughout the elementary and junior high school life.

Overachiever is slightly inferior to balanced achiever in junior high school children.

ON ASSOCIATION OF RADICAL AND CONSERVATIVE WORDS AND THAT OF THEIR VALUE

By Kitano, Eimasa

Kanazawa University

1) Words are regarded as the products of our social life, and frequency of their use, their value and familiarity are thought to have some connection with the question of our consciousness in social life.

Social consciousness makes itself appear, in author's opinion, in social attitude.

From the two points of view, that is, man's social attitude and word's value, the author conducted free association experiments with some selected words trying to observe the differences among them.

2) Thinking that man's attitude toward words may be either radical or conservative, the author chose some term of radical and conservative natures from six value types, and, ranging from the high-merited terms, classified the radical and conservative words into pairs according to the order of merit.

Thus he got thirty-six stimulus words.

Conducting free association experiment on them, he observed their response time and response words.

A total of ninety-three subjects.....all college studentstook part in the experiment.

The result of these experiments were as follows.

3) In free association, response time of radical words was shorter than that of conservative ones. In both radical and conservative words groups, the higher in value the stimulus words were, the shorter was their response time, and the lower in value they were, the longer was their response time. The number of the most frequently responded words in free association was larger in radical words group than in conservative one.

In conservative words group as well as in radical one, the higher in value the words are, the smaller were the varieties of the responded words.

4) That radical words were more rapidly res-